
クリスマスの奇跡

篠原悠哩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスの奇跡

【Nコード】

N3192B

【作者名】

篠原悠哩

【あらすじ】

あそひかなき

麻生香那紀はクリスマス前の金曜日に仕事三昧の毎日に何かが足りないと思いつつ、疲れた体を引きずって会社に出社した。毎年クリスマスに決まって急な仕事が降って沸いてくる。今年も例にもれず、繁野部長から声がかかる。月曜日の事前プレゼンに間に合わせ木藤が作った企画を全部見直してほしいとの依頼だった。仕方なく覚悟をきめて取り掛かった。その日の夜、休憩室で偶然館野部長と出会い、館野は香那紀が請け負った仕事を手伝うと申し出てきた。クリスマスに贈るとしてもホットな奇跡のラヴストーリー。

1 (前書き)

急に思い立って2006年12月23日から2日間で完結まで仕上げたものです。あの時はどうしてもクリスマスにまにあわせただけです。笑

季節過ぎてもこうして今、多くの人がお読みくださって毎回アクセス数が伸びていくのを楽しんでおります。本当にありがたいです。ここをひらいてくださったのも何かの縁。是非最後までお読みいただければ幸いです。

また、読後、是非感想などお寄せください。励みにしてまた、新しい作品を積極的に書いていきたいと思えます。では、クリスマスの奇跡をどうぞ。

AM・7:30。朝のラッシュの中、麻生香那紀あそつかなきは重い体をひきずりつつ、小走りに駅のホームへと向かっていた。香那紀は朝が苦手だった。もちろん、次々と沸いてくる人の塊が物のように電車に押し込まれる通勤ラッシュが苦手だからではない。会社にはいつて8年もたつと仕事が膨らみ、ここ数年は深夜まで残業が続き、0時を過ぎて最終電車で帰り、朝はいつもの時間に出勤という日が続くことも多い。どんなに長く仕事をして朝は時間を割り引いてはくれない。カードリーダーを8:30までにとおさなければならぬのだ。もちろん、仕事は待つてくれないので仕事の内容や期限によつては、休日も出ることもめずらしくない。したがって慢性的な睡眠不足と過労で重い体とボケボケの頭とお付き合いしているがゆえ、朝が苦手なのである。

香那紀は定期のカードを自動改札に通し、ホームの人ごみに混ざる。「2本は待たないと乗れそうにないな。」
そう思つて軽くため息をついて前から2両目の列に並んだ。この時間は列車が3分間隔に来る。電車に乗るまでに数分待たなければいけない。香那紀は電車の中で読もうと思つていた経済新聞をだして読みたい箇所のみ読めるように小さく折りたたんで読み始める。毎日の日課である。女性には珍しい光景である。香那紀は今年30歳のいわゆる男性と肩を並べて仕事をする総合職で、どんな仕事でも一旦引き受けたら最後までやりきり、仕事の中身も良い評価をもらう、いわゆる出来るワーキングウーマンとして会社では通っている。そのおかげか毎日が仕事三昧で、世間で聞く今時のOL生活とはまったくかけ離れた「会社で過ごして家で寝る」という味気ない生活を送っている。もちろん、付き合っている男性もない。まあ、これに関しては暇がないというより、香那紀の男つぱくりりしすぎる氣質が災いして、結構な美人でスタイルもかなり見栄えもいいはず

なのにもかかわらず、男友達はたくさんいても男以上に男らしいところが彼女にするには敬遠されてきたのだ。その辺は会社にはいつでも同じで、本人も自覚していた。混雑する中、なんとか2本目の電車に滑り込んだ香那紀は、もちろん立ちではあるが、なんとか新聞を読むスペースを確保してほつとする。新聞は、週末のクリスマスや年末年始の話題に関するニュースが目立つ。

「ああ、そう言えば世間はクリスマスか・・・。」
香那紀は他人事のように心でそうつぶやくと興味なさげに他の記事に目を通す。今日はクリスマス前の金曜日である。会社はきつと今夜や明日のイベントに浮き足立っている人も多いだろう。17:00の定時で急に人口が少なくなるのが簡単に予測できた。香那紀はと言えば、いつも仕事三昧でクリスマスにきまって急な仕事回过头きて、有無を言わず深夜までの仕事になる。入社したての頃はなんでクリスマスに私だけ・・・?とよく嘆いたものだが、毎年となるとさすがに諦めの境地である。たぶん、今日も急な仕事が舞い込んでくるであろうことはもうすでに予測して覚悟している。それでも、世間がクリスマスモードで盛り上がってくると一抹の寂しさやむなしさは感じていた。

「何してるんだらうか・・・、毎日毎日仕事しかしてなくて・・・。」

時折、オフィスで夜遅くに一人で仕事をしているとふとそんなことを考えてしまうときもある。仕事は嫌いじゃない。やりがいだってそれなりに感じる。認めてもらえるところ嬉しい、それでそれなりに昇格もしてビジネスライフとしては申し分ないように思う。それでも、香那紀は何かが足りないと感じていた。

約25分電車にゆられたあと、駅からはのんびり徒歩5分の道のりを歩く。ふと、後ろから聞きなれた声で威勢よく呼び止められる。

「おはようございます、麻生先輩。」

5つ年下の後輩の笹本隆一である。身長は170ちよつとでありあまり大きくはないが、人懐っこそうな笑顔で愛想がいいこともあり社内

でもまずまず人気のあるイケメンである。仕事は入社3年ともなるとそれなりにこなすようにはなっているが、おつちよこちよいでよく香那紀がカバーしてやる。笹本はデスクも隣同士で、昼食も一緒にとったり、雑談もよくするなど結構仲がいい。もともと入社時に仕事を教えたのが香那紀なので、今でもその延長上でこうして慕ってくる。香那紀も弟みたいな感じでつついつかまってしまつたのだ。

「おはよ。朝から何？うれしそうな顔しちゃって。」

いかにも年下をからかうような雰囲気です。香那紀が声をかける。

「えっ？そうですか？ははは・・・やばいな。」

「なんかいいことあったのね、その顔だと。」

「ええ、その・・・、アタックし続けていた人に昨日OKもらえたんですよ。」

笹本は照れくさそうに、でも、真つ赤な顔してうれしそうに言った。「へえ！あの、コンパで知り合つたつて言う、2つ年上のマドンナ？」

「声が大きいですよ、麻生先輩！」

まわりを見回しながら口に入差し指を当る。

「そうか、良かったわね。それじゃあ、もしかしてイヴはその人と？」

笹本が恥ずかしそうに頷く。

「やったわね！諦めず、アタックし続けてよかったわね。早速会社いったらコーヒーおごるわ。乾杯しましょ。」

香那紀はそう微笑むと笹本の腕を引つ張つて会社のビルに駆け込む。

「ちよつと、麻生先輩！」

急に引つ張られて転びそうになって近くを歩いていた男にぶつかった。

「すみません。」

笹本は香那紀の手を抜け出して立ち止まってお詫びする。

「ああ、笹本くんか、朝からにぎやかいな。」

笹本が顔を上げるとそこには見知った顔があつた。

「えっ？あ、館野部長！すみません。不注意で。」

「いや、気にするな、でも、君は麻生と仲がいいんだな。」
館野はちらつと笹本の後ろにいる香那紀をみる。

「すみません、失礼しました。」

香那紀も申し訳なさそうに誤ると笹本をもエレベーターホールにもう一度引つ張っていった。

オフィスに着くとなんとか始業15分前。休憩室の自販機で2人分のコーヒーをもってデスクにたどりつく。

「先輩、急に引つ張らないくださいよ。館野部長、絶対起こって
ますよ。もう。」

「ごめんごめん、災難だったわね。でも、大丈夫よ、あれぐらいで怒ったりしないわよ。」

「館野部長って怖いって有名じゃないですか。まずいですよ。目つけられてにらまれたらどうするんですか。俺、企画に物頼めないですよ。」

「そんなことあるもんですか。そんな肝のちいさな男じゃなさそうよ。彼。」

香那紀は軽く笑って返す。香那紀は館野のことをあまりよくは知らないがなんとなくそんな気がしたのだ。館野真人は33歳で社内ではクールで切れ者として名が通っていた。スピード出世で企画部長となったエリートである。前期の社内プレゼンでは何人も撃墜されている。彼には誤魔化しがきかないのだ。しかし、その容貌は背が高く、サラリーマンといった風よりもモデル並みにセンスも着こなしもいい。顔も端正で美しい。眼は漆黒のように黒く鋭い。仕事以外は女性には上品でスマートな対応をするので独身であることも手伝って人気は高い。香那紀は会議などで一緒になったことがある程度で、あとは噂しか知らない。それでも、仕事のこと以外では大して気にしないような度量がありそうに思えて、香那紀自身はわりあい好印象を持っていた。

「さあ、今日も一日がんばるか。早く帰るんでしょ？」

香那紀は笹本をつつついて小声でいった。

「今晚は勝負日なんでしょ？」

香那紀がにやにや笑う。

「先輩！」

困ったようにあせって笹本が睨む。香那紀はくすくす笑った。

デスクに座ると仕事はじめにまずはメールチェックと社内情報のチェックをする。香那紀がPC立ち上げをすまし、社内ネットにアクセスしているのとふと繁野部長から声がかかる。

「ああ、麻生くん、ちょっと来てくれないか。」

にやけていた顔が急に仕事の顔になる。

「はい。」

繁野は香那紀と目を合わせると小会議室を指さした。香那紀は黙って頷いて繁野の後に会議室に入る。繁野は香那紀が所属する営業企画部の部長で40過ぎの少し体格のいい、いかにも人のよさそうな秀囲気の男である。

「おはようございます。繁野部長。どのようなご用件でしょうか。」
繁野は急に申し訳なさそうな顔をする。その顔を見た途端香那紀はいやな予感がした。

「すまないが、このプレゼン資料作成を至急やってくれないか。」
だされた資料の束を香那紀がペラペラめくる。

「これはインタープライム社への商談用のプレゼン資料ですね。」
「ああ、一度、木藤君にまかせたのだが、統括からクレームがついてね、やりなおさないといけなくなっただ。木藤君にはまだ任せるには早かったようですね、企画の内容自体を替えるといわれてしまったんだよ。確かにこの内容では私も不足だと思っ。それで、君に代わってもらいたいのだよ。」

「はい。わかりました。」

「いつまでですか。」

「うん、それが、統括交えてのプレゼンは25日なんだよ。」

「え？25日って月曜日じゃないですか。今日、金曜ですよ。部長
！」

「それだから君に頼んでいるんだよ。この短期間で仕上げられるの

は君しかいないからな。今までも君はどんなに無理な状況でもなんとかしてくたからな。」

香那紀はため息をついた。

「はあ、わかりました。出来るだけの努力はします。」

「受けてくれると思ったよ。さすがだな、麻生マネジャー。インタープライム社のデータは木藤君のものをそのまま君のフォルダに貼り付けておくから使ってくれ。」

「はい。わかりました。」

「たのんだよ。」

繁野はすまなそうに香那紀に手を合わせる。香那紀はもう一度ため息をついてそれに頷いた。席に戻ると笹本が香那紀の憂鬱そうな顔を見て声をかけてきた。

「先輩、どうしたんですか、さえない顔して。部長に何か言われたんですか。」

「ああ、今日から週末は徹夜だわ。」

「ええ？クリスマスなのにまたですか？先輩。」

香那紀はため息をつく。

「毎年何かあるとは思っけど、やっぱり今年もかってかんじよね。」
笹本が気の毒がって同情する。

「先輩、クリスマスと縁がないですねえ。」

「あほ！縁がないのはクリスマスだけじゃないでしょうが。世間様のイベントには縁がないのよ。だからもてないんでしょうが。」

「それ自爆してますよ。先輩。」

笹本が笑いをこらえてつつこんだ。

「大きなお世話だ。笹本。」

香那紀はむっとしながら応える。ふと笹本は香那紀が手にしていた資料に目をやる。

「プレゼン資料ですか。それ。」

香那紀が頷く。資料の表紙にインタープライム社の名前が見える。

「これ、インタープライム社じゃないですか！」

「ばか！しっ！」

デスクの何人が向こうにいる木藤がちらっと香那紀を見た。笹本は急に小声になった。

「これ、木藤先輩が担当してたじゃないですか。どうして。」

「統括に却下されたらしいの。担当者も替えて企画内容から見直せってことらしいわ。」

「うえ〜。そりゃたいへんだ。これいつまでなんですか。」

笹本が目を剥く。

「しかも月曜までよ。」

「え？25日ですか？今日、金曜ですよ、先輩！」

「そう、だから徹夜なんじゃん。」

「そりゃ先輩のところに来るの納得だよな。週末だけでこれ仕上げられるの先輩ぐらいしかいないですよ。手伝いたいのもやまやまなんです。すみません、今日は事情付きなので勘弁してください。」

「わかってるわよ。そんなこと。楽しんでらっしゃい。きっと月曜日は私死んでるかもしれないけど。」

「そんなあ〜。先輩無理しないでくださいね。」

笹本が甘えたような声を出す。

「わかったって。いつまでも人にかまってないで早く仕事にとりかかなさい。」

うっとおしそうに軽く香那紀が叱りつける。

「はいはい。かしこまりました。」

「返事はひとつで！」

「はい！」

そう返事をする。笹本は気合をいれて自分の仕事に没頭し始めた。

香那紀も木藤の資料に目を落とした。

その日のルーチンワークを昼食もそこそ午前中にすべて片付け、午後から企画の練りなおしで費やした。夕方までかかって大枠のストーリーはできたので、繁野のところへ報告に行くことにする。香那紀はストーリーの構成をあらかじめ粗粗打ったものをもって小会議室で繁野に説明をした。

「さすがだな、この内容でいこう。あとは先方が納得いくようにデータの裏づけをわかりやすく資料に表現してくれ。週末、面倒かけるが、よろしく頼むよ。」

そういうと、繁野はお取引先の経営者様との懇談があるからと出かけてそのまま帰宅すると言って消えた。金曜日である。それは口実で呑みにいくのはバレバレだった。

「部下に仕事押し付けて自分は飲みにいっちゃうんだから、ほんと勘弁してよ。」

そうつぶやいてどんよりした気分ですぐに席に戻る。デスクにもどつてくるとほとんどの人が既に退社してちらほら人がいる程度だ。笹本も香那紀のデスクにメモをはりつけて早々に退社していったようだった。

「先輩、お先に帰ります。ばっちり勝負してきます。先輩、死なないでくださいね。俺、月曜日に介抱しますから。では、お先に。」
香那紀はふつと笑う。

「がんばれよ。月曜に生きてたら話きいてやるから。」
独り言のようにメモに返事を返すと、香那紀は一人仕事に取り掛かった。しばらくは数字のグラフ化で見栄えのいいものを工夫していったという間に時間がすぎる。香那紀は昼間コンビニで買って置いたサンドイッチに手をつける。

「ああ、コーヒーでものもっかな。」
休憩室にいこうと立ち上がると、部屋にはすでに誰もいなくなつて

おり、いつの間にか一人になっていたことを知る。一人になってみるとこの部屋はやけに広い。普段は50人ぐらいいるから、狭苦しい感じがしていたが、誰もいなくなってみるとがらんとしてやけにひろいと感じる。いつもは残業組みがちらほらいるのだが、今日は人っ子一人いない。香那紀はクリスマスだからだよなと思いつつ部屋を後にした。休憩室でコーヒーを手に窓からふと外の景色に目をやる。大通り沿いにあるこのビルの周辺はにぎやか、イリュミネーションで華やかに彩られている。香那紀はしばらく眺めながらコーヒーを飲んでいた。そろそろ仕事に戻ろうかと振り向いた時、誰かが休憩室に入ってきた。

「ああ、麻生くんか。まだいたのか。」

館野だった。香那紀は館野に声をかけられるのははじめてだったのでびっくりする。

「館野部長、お疲れ様です。まだ仕事が残っているもので。」

少し微笑みながら緊張気味に応える。

「君はいつも遅くまで仕事をしているんだね。」

「えっ？ご存知なんですか？」

館野の企画部とは部屋が違うので残業組みでいつも会社にいることを知ってるのが以外だった。

「ああ、俺も残業組みだね。君たちの部屋の前を通るといつも男に混じって女の君が仕事してたものだから。」

そういうと館野は優しく微笑んだ。香那紀は一瞬どきりとする。館野の端正で知的ないつもは厳しい顔が柔らかく笑ったのが以外で、しかも初めて話をするような自分に笑いかけていること自体におどろいた。香那紀は館野が笑うところは見たことがなかったのだ。

「何、そんなおどろいたような顔してるんだ？」

「え？ああ、すみません。館野部長つてもっと厳しくて怖い人かと思っただけだったので、こうやってお話をさるのが以外だったんです。」

「怖い？俺が？」

館野がおどろいて聞き返した。

「はい、時々会議などで拝見するだけですが、頭が良くて仕事に厳しい方だと思いました。」

「そりゃ、仕事は厳しいさ。誤魔化しや、手抜きはゆるさない。でも、俺はいつも怒っているわけじゃない。」

館野がまた笑う。

「君こそ、仕事には厳しく、手抜きをしないだろ？君の仕事は評判だよ。さすが、こんな遅くまでやってるだけはあるな。まだ相当かかるとか。」

「いえ、そんな回ってくる仕事をとにかくできるだけ仕上げているだけです。いつも確かに遅いのですが、今日は特別です。月曜の事前プレゼンに間に合わせてくれということとで企画のやり直しの件を今朝いただいたものですから、それまでに間に合わせないといけません。」

「ああ、それもしかしてインタープライム社の件か。」

「ご存知なんですか？」

「ああ、繁野が月次会議で統括にコテンパンにやられてたからな。」

あれ、木藤くんが担当したんだろ？結局君のところにもわったのか。」

香那紀は苦笑して頷いた。

「そりゃ大変だ。間に合わせられるのか？」

「なんとかがんばります。」

「なんとかってあの量からするとほぼ徹夜でやらないと間に合わないんじゃないのか。」

「はい、おはずかしながら。」

「でも、繁野はいそいそとさつき帰っていったぞ。だれも手伝いはいないのか。」

「はい、金曜日ですし、クリスマスですから。みなさんいろいろとご予定があるのでしょう。しかたないですね。でも、大丈夫です。いつものことで慣れてますから。」

「よし、じゃあ、俺が手伝うよ。」

「え？」

突然の館野の申し出に香那紀は目を剥いた。

「裏づけデータなんかあったらうちの専門だからな。少しは役に立てるだろう。」

「そんな、もうお帰りになろうとなさってたんですよ。ご予定もあるでしょうから、もうそんなにお気になさらないでください。」
あわてて香那紀が丁重にことわると館野はまた微笑んだ。

「いいんだよ。どうせ、予定なんかない。どっかにぶらっと寄って帰ろうと思ってたぐらいだよ。」

「え？でも、そんな申し訳ないですから……。」

「何言っているんだ、我が社の大口の大事な顧客への商談用だろ？質のいい物もっていかないとな。一人でやるよりいろんなことに気付けるからきつと早くていい物ができるさ。それに俺もインタープライム社に関しては興味があるからな。それでどこまでできているんだ？」

「ええ、大卒のストーリーは夕方に繁野部長に確認してもらい承認済みです。今はその中のもともある資料からのデータをわかりやすいグラフにするためにレイアウトや色使いを考えていたんです。」
「そうか、じゃ、まず大卒のストーリーの説明をしてくれよ。」
「はい。」

そういうと二人は休憩室を出て営業企画部のある部屋へと向かった。

営業企画部の香那紀のデスクにたどりつくまで食べかけのサンドイッチをおきっぱなしにしてあったことに気づき、香那紀はあせる。

「すみません、だらしなくて。」

あわてて片付けようとする。

「なんだ、まだ食事してないのか。」

「はい、なんだかんだいっていつも適当なんですけど、徹夜になるかと思つて少しはいれて・・・」

香那紀が言い終わらないうちに館野が話しはじめる。

「よし、じゃあ、まず腹ごしらえに行こう。俺も食べてないからな。そこで話聞くんよ。」

「え？あ、はい。」

香那紀はきょとんとしている。館野はポケットから携帯を取り出し、どこかに電話し始めた。予約しているようだ。

「ああ、酒はのまない。時間がないから早めに来るものを適当に

ああ、麻生くん、嫌いなものは？」

「え？あ、あの、特にないです。」

館野のペースに圧倒されている。

「じゃあ、10分以内でいくよ。よろしく。」
そういつて館野は電話を切る。

「じゃ、麻生くん、とりあえず戸締りしようか。俺は奥を閉めてくるから麻生くんはすぐにでかけられるようにしてくれ。」

そういうと館野はクイックに部屋の奥に入っていく。香那紀はこの急な展開に驚きながらも、とりあえずPCの電源を落とし、コーヒーのカップをかたづけ、バックに資料を詰め込みコートを持った。そこへ館野がもどってくる。

「じゃ、いこうか。」

「あ、はい。」

香那紀は館野のペースにひきずられるように館野のあとを追いかける。館野は背が高く180ぐらいはあると思われた。香那紀は170がきれるぐらいなのでその差10センチ程度だが、館野が近くにいるともっと大きく感じられた。度量が大きく、強引なぐらいの気質は傍にいる人間をのんでしまうのだろう。それで大きく感じるのだと香那紀は館野の背中を見ながら感じていた。館野は中央監視室の警備員にすぐ戻るからと一声かけて通用口からすばやく出て行く。香那紀は警備員に一礼すると館野のスピードに遅れて小走りにでていく。香那紀が通りにでると館野はすでにタクシーを止めて香那紀を手招きしている。あわててさらに走ってうながされるままにタクシーに乗り込む。

「すみません、のんびりしてて。」

「いや、いいんだよ。君を待たせなくなかったから。急ぎすぎたかな。」

館野が香那紀の顔をのぞきこんだ。香那紀は急に館野が近づいてきたので心臓がぴくんと一瞬はねあがった。

「い、いえ、ぼおつとしてる私が悪いんです。部長はなんでもすぐに段取りして先のことまで考えていて、やはり、頭の良い方ですね。驚くばかりです。」

館野がくすくす笑う。今日はよく笑う。いつもそうなのかもしれないが、香那紀はあまり面識がないため館野が笑うたびに驚く。

「君も頭がよくて、男気があってりりしいらしいな、まわりから頼りにされてるだろ?」

香那紀がぱあつと赤くなる。

「男気って、あの……。」

館野がその様子を見てまた笑う。

「ははは、ごめんごめん、悪気はないんだ。これでもほめたつもりなんだよ。そういうやつが俺は好きなんだ。」

香那紀は館野の「そういうやつが好きなんだ」と何気なく軽く言った言葉にさらに心臓が大きく鼓動する。

「俺はそういうやつは男でも女でも好きなんだよ。そういうやつと気が合うし、仕事してても遊んでても気持ちいいからな。あ、すみません、そのあたりでいいです。」

館野の言葉に運転手は道路の路肩に車を寄せて停めた。車を降りるとすぐに和食の少しモダンな佇まいの店に館野がはいつていく。香那紀もあとに続く。店にはいるとすぐに奥の小部屋に案内された。館野が促すままに席につくとすぐに前菜がでてきた。

「仕事の話をするのに、ギャラリーがいるとまずいと思って部屋をとったんだ。さあ、食べよう、ゆっくりはしてられないからな。」
そう促されて香那紀は箸をとる。

「いただきます。」
少し緊張気味に前菜に手をつけ、口に運ぶ。

「早速なんだが、さっきの大枠のストーリーの話をお聞かせしてくれないか。」

食べながら館野はすつといつもの厳しく鋭い目つきのやり手のビジネスマンの顔になる。香那紀が緊張しているのもお構いなしで話を促した。

「あ、はい。」
香那紀は緊張している場合ではない、これは仕事なんだからと自分に言い聞かせ、館野の要望に応じてストーリーの説明をした。

「なるほどな、そうするとインタープライムの現状のデータとうちと市場のデータの正確なやつがあるな。この間、繁野が出してた資料ではそのデータがあまりまいで説得性もなかったからな。木藤はどこからあのデータをひっぱったんだろうな。うちには依頼はなかったぞ。」

館野の話に香那紀は苦笑する。おそらく木藤は他に数々の案件を抱えていたのと性格的に少々大雑把なところがあるので期限に間に合わせるために企画をとおさなかつたんだろう。通したデータを使えば資料の中身を詳細にしないといけなくなるからだ。

「あとはうちと契約したときの業績予想だな。そのデータも甘かつ

たな。どんな積み上げをしたのやら。もう少しシビアに緻密に積み上げないと信憑性がない。インタープライムはそんな甘い会社じゃない。短い期間に力をつけてきたやり手の企業だからな。」

「はい。そうですね。私もいろいろ外部からのデータも引っ張ってみたんですが、ただの勢いだけではないですね。戦略もしっかりしているし、計算づくのようです。それだけに下手なプランはだせません。」

「たしかにな。わかった、じゃあ、そのデータの収集を俺が担当するとしよう。君はそのデータの見せ方やプランの詳細の見直しを担当してくれ。」

「はい、わかりました。」

仕事の話を終えると館野は急に柔らかい表情になって香那紀に話をしてくる。

「ところで君は笹本といつも一緒にいるよな、今朝も一緒だっただろ。つきあってるのか？」

唐突な館野の質問に香那紀はまた、さっきの緊張が戻ってきた。妙にどきどきする。

「え？い、いえ、笹本くんとは先輩と後輩の仲です。笹本くんが入社したときに指導を担当したんです。それでなんとなく気が合っし、仕事もチームで一緒にすることが多いのでなんだかんだいっしょにいるんです。」

「へえ、あんまり仲がいいからってつきりプライベートでもつきあってるのかと思つたよ。」

「いえ、それはないです。笹本くん、今日は長い間アプローチし続けたマドンナと初デートするって早々に帰りましたよ。」

あわてて否定する。

「なんだ、じゃ心配することなかったんだ。」

「え？」

香那紀はどきつとする。

「いや、仕事とはいえ、遅い時間に君と二人きりだからな、彼氏だ

「つたら申し訳ないとおもっただけさ。」

館野はすまして笑う。香那紀はその時なんだかがっかりした。そうだが、館野は自分に興味をもってくれてるのではなくて仕事に興味をもっているだけなんだからと少し期待した自分を諫めた。

「付き合っている人はいないのか？君は美人だから相当もてるだろう？」

「え？もてませんよ。私なんて。友達はたくさんいますけど、彼女にしたいくないみたいです。」

「彼女にしたいくない？」

「はい、さつき部長もおっしゃったじゃないですか、どうやら男の人より男らしいみたいです。」

香那紀が笑う。館野はその漆黒のような瞳をまっすぐ香那紀にむけた。

「そうかな。そうやって言ってるやつらが軟弱なんじゃないのか。」

君はそこらへんの男じゃ乗りこなせないぐらいに上等だってことだと思っけど。」

「え？」

香那紀は再び館野の言葉に翻弄される。館野がさらっという言葉に香那紀は変な期待をしたり、がっかりしたりでいちいちどきどきさせられる。

「さて、そろそろ行くとか、遅くなるとそれだけやるのが遅れる。」

「そっとうと館野は立ち上がった。香那紀も続いてたちあがるうとすると館野に制された。」

「いいよ、支払いをしてくるから、まだ座っててくれ。」

「あ、でも……。」

香那紀がバックを取ろうとする。

「いいよ、ここは俺のおごりだ。誘ったのはおれだからな。」

「でも、仕事を手伝っていたくのお食事まで……。」

香那紀はゆずらない。館野は仕方ないなという顔をして苦笑する。

「いいんだよ。その代わり仕事で返してくれよ。俺は君と仕事できることがうれしいんだ。期待してるよ。」

香那紀は唐突にビジネスマンなら殺し文句だろう言葉を言われて素直に引き下がる。

「はあ、ありがとございます、それではお言葉に甘えて……。」
館野はその様子ににっこり微笑むと部屋を出て行った。

食事をすませ、早々に会社に戻ると早速仕事を始めた。館野も笹本の席にすわってPCを立ち上げ、作業を始めた。香那紀は館野が当然のように隣に座ってきて妙にどきどきして落ち着かず、集中するのに苦労していたが、そのうち作業に没頭し始めた。館野も口を開かず、部屋の中には二人のキーボードを叩く音だけが響いていた。どのぐらい作業したのか、はじめてからしばらくたって、館野が急に口をひらいた。

「よし、とりあえず、インタープライムの現状データを揃えて君のフォルダにいれといた。見てくれないか。」

「はい。」

プランの練り直しのところを手をつけていた香那紀は館野がいうようにインタープライムの現状データを開く。香那紀は驚いた。元のデータはひどく細かいデータなのに館野が作成したものは余分なところが見事にカットされて、並びかえられ、香那紀がねらうことがわかるような一覧になって並んでいる。短時間でここまで気の利いたデータ提供をする人は見たことがなかった。

「はあ、すごいですねえ。さすがです。ここまで出来ていればこちらでもあまり加工せずにいけます。」

香那紀が正直に館野をほめると館野の端正な厳しい顔がふと優しくなる。

「なんだか君にほめられるとうれしいね。」

香那紀がまた、どきっとする。

「え？でも、部長はしょっちゅういろいろな人から賞賛されたりなさるでしょう？」

あわてて、話をかわすように返す。

「そんなことないよ。俺だっしょっちゅうしかられるさ。」

「え？部長がですか。」

「そりゃあそうさ、統括にコテンパンにやられたことだってある。仕事だからな。」

香那紀はPCで作業していた手を止めて、隣の館野を驚くように見た。

「へえ、なんでもスマートにこなしてしまう人だとばかり思っていました。」

館野は困ったように軽くため息をついた。

「スマートにこなせたら毎度毎度遅くまで残業してないよ。」

「あ、それはそうですね。私が事実、要領悪いのでいつも遅いですもん。」

「君のは仕事が多すぎなんだよ。」

「それをいうなら部長もです。」

お互いにフオローして噴出したように笑う。館野は仕事に厳しくクールな印象があり、香那紀にとっては遠い人のように感じていたのに、今日始めて話をしたばかりなのに今はとても親近感が沸いてくる。それが、香那紀にとっては不思議でならなかった。こうして何気ない話をしているのさえも楽しく感じられる。いつもは期限に向けて殺伐と仕事をこなして早く終えて帰って寝たいとばかり考えていたが、今はずっとこうして館野と一緒に仕事をしていたい気分になっていたので。クリスマスに降って沸いてきた大変なやつかいな仕事と思っただが、今は楽しいとさえ感じる。香那紀はそんなことを思っただけで微笑むとプランの練り直しを区切りのいいところで切り上げ、データ加工に入った。館野も市場のデータ集めの作業にまた没頭していった。

それからどのぐらいの時間がたったのか、ふと館野が立ち上がる。「ちょっとコーヒー飲んでくるよ。君もいくかい？」

香那紀は今の作業で途中で立ちたくないと思い、丁重に断ると館野は頷いて部屋を出て行った。香那紀はそれからもしばらく一人で没頭して作業をしていた。それでも、だんだんと眠気がさしてきそうつらうつらし始めた。香那紀はこのところ最終電車ばかりだった

ので睡眠不足だった。随分我慢していたが、そのうち意識が遠のいた。そこへ館野がコーヒーを二人分もって戻ってきた。

「麻生くん、コーヒー……。」

館野は香那紀が眠っていることに気づき、ふつと微笑む。

「そりゃそうだ、休憩ナシで今午前3時だもんな。よくやるよ。君は。」

そういつて隣のデスクにコーヒーを置くと近くの椅子に無造作にかけてあったコートを取り、起こさないようにそつと香那紀の肩にかけてやる。館野は傍で少し香那紀をじつと眺めると香那紀の白い滑らかな頬に軽くキスをした。

「ん……。」

その時香那紀が動いたので気付いたのかと思ひ館野は一瞬どきつとしたが、そのまま眠っているのほつとして隣のデスクにもどって作業の続きをはじめた。

香那紀がぼんやり目をさますと、外が明るい。そして見えてきた景色でそこがオフィスであることに気付きはつとして起き上がる。しまった、寝てしまった。ふと隣をみると館野もいない。香那紀が立ち上がるうとするとう肩からコートが滑り落ちる。あやうく床に落ちる前につかみとると館野が来ていたコートであることに気付いた。まわりを見回してみる。すると一番近い応接室のドアが開いている。香那紀が応接室にいくとその長いソファに館野が横になつて眠っていた。香那紀は手に持っていたコートを館野にかけてやる。

「お気遣いありがとうございます。これはお返しします。」
そう小声でいうとそつとその場を離れた。時間をみると朝の6:30だった。眠った分追いつかないかと思つて自分の席に座るとデスクにメモが張つてあるのに気付いた。

『市場のデータ作成済み。君のフォルダに貼り付けしておいた。よろしく。少し睡眠をとるよ。あとで業績予測の積み上げの打ち合わせをしよう。館野』

館野の字は読みやすくしかもしつかりとした筆圧で館野らしさがにじみ出ている。香那紀は思わずにこつと笑う。

「館野部長のおかげで早く出来そうです。週末にこんなことに付き合つてくださり感謝してます。」

そうメモを持ち上げ一礼すると仕事の続きにもどつた。それから30分ぐらいたつて館野が起きたらしく、応接室から出てきた。

「おはよう、なんだもうおきて仕事してたのか、タフだなあ君も。あくびをしながら眠そうな顔をして香那紀に声をかける。」

「すみません、コート。お気遣いいただいて。」

「ああ、女性だからね。いくら室内といつても冷えるだろうから。」

「ありがとございます。館野部長はやさしいんですね。」
香那紀が微笑む。

「それも意外か？」

「え？」

「顔にそう書いてある。」

「え？」

香那紀は思わず手で顔にふれる。

「あっはっはっは。うそだよ。君がいちいち驚くような反応するか
ら意外だとおもってるんだってすぐにわかったただだよ。君は表情
豊かだからな。おもしろい。」

香那紀は真っ赤になる。

「ああ、そうだ、目覚ましに向かいのカフェに行つてなんか買つて
くるよ。君は何を飲む？」

「え、そんな、私が行きます。」

香那紀が立ち上がるうとする。

「いいよ、君のほうが仕事が多いんだから。それに眠気覚ましがつ
ら外の空気をすつてくるよ。」

「ではコーヒーブラックの濃い目ならなんでも。」

「OK。じゃいつてくる。」

そういうと館野は腕を大きくのばして伸びをしながら外に出て行つた。香那紀はいったんロッカールームにいつて化粧品等の泊まった
ときのために置いてあるものをとつてきて洗面所で顔を洗ったり、
髪を整えたりした。化粧はしている暇もないので簡単にお手入れだ
けして結局そのままデスクに戻った。しばらくすると館野が戻つて
きて、PCの前で仕事しながら食べるのも味気ないからと休憩室で
ささやかな朝食タイムを取ろうと香那紀を休憩室まで引っ張りだし
た。

「へえ、素颜なんだ。化粧、落としたのか。」

館野が微笑む。香那紀はすっぴんを指摘されて赤くなる。

「ええ、すみません。見苦しいとは思いますが、化粧している時間

はないので、とるだけにしました。」

「いや、いつもステキだけど、素顔はもっといいな。綺麗だ。」
館野の言葉に香那紀はまた、ときどきする。

「部長、へんなこと言わないでください。私に言ってもなんにもメリットありませんよ。彼女にでも言ってください。」

香那紀は牽制するように冗談ぽくいった。

「なんだ、人がせつかくほめたのに。言っとくけど、俺には彼女なんていないんだから、気にしてくれなくてもいいんだ。」
笑いながら冗談ぽくむくれる。

「へえ、驚きました。館野部長は社内の女性にとても人気があるしもてるでしょうから彼女の一人や二人とつくにいらっしやると思っていました。」

「俺はそんな器用じゃないよ。」

「そうですか？部長は女の人の心をつかむツボを心得ているような気がしますけど。」

香那紀は言ってしまったてからはっとした。

「へえ、たとえばどんな風に？」

意地悪っぽく館野がにやにや笑いながらつつこんでくる。館野の誘導質問について思ったことを口にしてしまいそうになる。自分が昨日からときどきさせられてばかりだということを白状するはめになっ
てしまうのをなんとか回避しようと思那紀はあせる。

「あの、いえ、頭が良くて機転がきくのでそんな人じゃないのかなと思っただけです。」

香那紀はなんとかその場を繕う。しかし、館野はじつと香那紀の顔を覗きこんでくる。香那紀は恥ずかしくて耐えられず、思わず立ち上がる。

「さて、仕事に戻りましょう。部長。」

館野はくすくす笑っている。

「はいはい。君は面白い人だね。」

「もう、いい加減にしてください。」

香那紀は顔から火がでそうなくらい真っ赤になって足早に休憩室からでていった。香那紀が席にもどると館野も後から戻ってきた。まだ笑っている。

「もう、人をからかわないでくださいね。」

「からかってなんかないさ。なんだか、かわいくてつかまいたくなるのさ。」

香那紀はまた真っ赤になる。

「もう、仕事しましょう。部長。」

「はいはい。そうします。香那紀殿。」

香那紀は知らん顔してPCの画面に見入っているふりをしたが、館野が麻生じゃなくて香那紀と呼んだことに気付いて、どきっとして耳まで熱くなってしまった。それを気付かれないように香那紀はキーボードを打ち仕事に集中している振りをした。

「さて、業績予測の件だけど、少し打ち合わせいいかな。」

その言葉に香那紀はふっと仕事モードの顔になる。

「はい。」

「昨日まで現状のデータと市場のデータを調査していて気づいたんだが、インタープライムはうちがねらっていること以外に新たな戦略をもっているんじゃないかなと感じたんだ。」

「はい。私も同感です。それで、昨日外部のデータを調べてみて、そっちの筋に詳しい友人がいるのでメール飛ばして確認したんです。そしたら、新たな市場開拓をねらってデルメディア社に粉をかけていることがわかったんです。」

「なるほど、デルメディアか・・・。」

「しかもインタープライムの狙いですが、その内容をうちが獲得すれば、今の企画以上に利益が増大するかと思えます。」

「その内容がわかるのか。」

「はい、詳しくはないですが、差しさわりのない程度にもらった情報からその辺のことは予想がつきます。」

「そうか、それじゃあ、企画変更といこうか。いまからやれる自信

はあるか？」

「はい。やります。」

「なんだか、君と仕事しているとわくわくさせられるな。久しぶりだよ、こんな感覚。詳しく君の考えを聞こうか。」

二人で意見を戦わせながら2時間ほど詳しい打ち合わせをすませるとまた二人は手分けしてそれぞれの仕事に没頭した。昼も近くで簡単にすませ、時折休憩する以外は黙々と仕事を進めていた。夕方の5時頃になって、あらかたできあがったのでそこからはプレゼンしながらチェックした。数箇所見直しをしないといけないところはあつるもののほぼうまくまとまった。

「君はほんとセンスがいいな。見やすいレイアウトと言葉の使い方もインパクトがあつてわかりやすい。感心するな。繁野のところ置いておくのもつたいないよ。うちの部に来て欲しいくらいだ。」
館野が香那紀をほめると

「ありがとうございます。私も部長との仕事はとてもしやすいので一緒に仕事ができたらいいと思います。」

香那紀も素直に返した。仕事が一とおり一段落してほっとしたような表情だ。

「さて、夕方になつたし、どうする？昨日帰つてないからしつかり寝たいだろう、あとは明日にして帰らないか。」

「あ、はい。そうですね。」

館野から今日はこれで切り上げるとつげられると香那紀は体は疲れているのになんだか、寂しい気がした。このままもうしばらく一緒にいたい気がしていたのだ。館野は香那紀の少し残念そうにしていふ顔を見てふつと微笑む。

「9時か、今からじゃたいしたとこいけないけど、食事して帰ろうか。」

香那紀がつれしそうに顔を上げる。

「え、いいんですか？」

「ああ、どうせ、このまま帰つても一人だしな。食べるものなんて

「おいてやしない。」

館野はそういつて苦笑する。

「え、じゃあ、ご一緒させてください。」

館野がにこにこ笑っている。

「やつと遠慮しなくなったな。」

「え？あ、すみません。」

香那紀はぱつと赤くなる。

「いいんだよ。そのほうが君らしくて。」

そういつてクスクス笑いながらデスク周りを片付け始める。香那紀もPCの電源を落としてデスク周りの資料を整える。

「明日は昼間用事をすませて午後3時ごろ来るからそれまでにさっきの箇所の修正をしておいてくれ。明日は完全に仕上げるつもりだから何時までかかるかわからないぞ。そのつもりで支度してくるといい。」

「はい、わかりました。」

香那紀が仕事モードで威勢よく返事をする。館野はだまって頷いた。館野はまた、どこかに電話して予約をしていた。

「よかった、運よく空いてたよ。いくか。」

向かった先はイタリアレストランだった。カジュアルではあるがそこそこ洗練されていて上品な感じで嫌味がない。

「ここのパスタはうまいんだ。何食べたい？」

「へえ、いい感じですね。そうですね、じゃ、このきのこのホワイトクリームソースにします。」

「ワイン飲んでもいいかな。君は？」

「ええ、では少しいただきます。」

館野は頷くとコースで注文し、ワインは白を頼んだ。すぐに持つてこられたワインを館野が慣れた感じて香りを確認してテストイングをすませると、目の前にあった白くて少し黄味を帯びた透明の液体がグラスに注がれた。

「じゃ、明日の完成を祈って乾杯。」

館野の言葉に少し緊張した感じでグラスを重ねる。一口含むとぱつとあまずっぱいフルーティーな香りが広がる。

「おいしい。」

香那紀がおもわずにつこりする。

「口にあつてよかった。」

館野も優しく笑う。

「普段から、君はお酒を良く飲んだりするの？」

「いいえ、会社でなにかあるときぐらいです。お酒は好きですけど、そんな時間もないのでたまにしかいただきません。」

「へえ、じゃあ、あんまり強くないってことか？」

香那紀がニコニコしている。

「ぶ・ちょ・う、それは早とちりです。私世間では強いらしいです。」

得意げに香那紀がちゃめつけたつぶりに言った。

「へえ、そうなのか、なんだ、じゃ、つぶれたりしないのか。」

館野が残念がった感じのそぶりをする。

「なんか、変なこと考えていませんか？部長。」

香那紀も飲んでいるせいか気が大きくなって館野につっこみをいれる。仕事が一段落したせいで少しリラックスしているのか仕事以外の館野の話に臆せずついていく。

「そりゃあ、俺だって年頃の男だからな、美人を前にそれぐらい考えるさ。」

「残念でした。もう少しかわいげがある人とお食事できればよかったですね。」

香那紀が笑いながら軽く受け流す。

「いや、十分かわいい気あると思うよ。君は。」

館野が少し真面目な顔して言ったので香那紀は急に緊張してどきどきする。

「部長、これおいしいですね。オリーブオイル好きなんです。私。」
話をはぐらかすように、目の前の前菜のオリーブオイル和えをほお

ばる。館野はその様子に目を細めながらワインを口にする。

「ここは時々くるんだ。なかなかいい店だろう?」

香那紀は話がそれてほっとしたという表情で頷く。

「お一人ですか。」

「誰と来ているのか気になるのか?」

館野が笑いながらもじつと香那紀をとらえたまま聞き返してきたので香那紀はまたどきっとする。

「いいえ、部長はこういうお店にお一人でよくいらっしやるのかと思つて聞いただけです。」

香那紀が口を膨らませている。館野はくすくす笑い出した。

「ここは知り合いの店なんだ。だから一人で来ているときもあるし、仕事からみてメンバーを連れてきたこともあるよ。」

「そうですね、会社に比較的近いですね。こんなところにこんなステキなお店があるなんて知らなかった。」

香那紀は館野の回答に妙に安心して目の前に出された料理を積極的に口へ運んだ。このあとパスタを食べながらワインを二人で1本あけて、デザートとエスプレッソをたいらげると香那紀はもう大満足だった。

「もうおなかいっぱいです。おいしかったです。いいですね、このお店。」

「気に入ったか?じゃ、また来ような。」

香那紀はうれしそうに大きく頷いた。その様子に館野がまた笑う。

「君は飲むと子供みたいだな。面白い。」

「部長!私もういい年なんですよ。失礼な。」

香那紀がまた膨れる。館野がまたくすくす笑う。

「じゃ、遅くなるからそろそろ行こうか。送るよ。」

「いえ、あの、大丈夫です。私一人で帰れます。」

「一応、男として女性を遅くに一人で帰すのは気が引けるからな、送っていくよ。」

やさしく言っているが館野の言葉には有無を言わせない響きがある。

「……はい、じゃあ、お願いします。」

香那紀は素直に受け入れることにした。外にでてタクシーを捕まえると先に館野が乗り込んでその後香那紀が乗りこんだ。車内は暖かく自宅まで向かう間じつとしているとぼかぼかしてきて眠くなってきた。窓の外をみてぼんやりしていると館野が近づいてきて香那紀の体を自分の傍に寄せた。

「眠いんだろう。寄りかかってもいいぞ。随分がんばったからな。」
香那紀は思いもよらない館野の行動に驚いてときどきしたが、館野に体をあずけるとなぜかひどく心地よく穏かな気分になった。香那紀はしばらくぼんやりしていたがそのまま意識を手放した。自宅に近づいた頃、館野に呼ばれてはっと目が覚めた。その瞬間、自分が館野にもたれかかっていたことを思いだしてときどきして体が熱くなる。

「あ、すみません、私ったら。酔っ払ってて。」

館野は優しい表情で香那紀をみつめている。

「いや、いいんだよ。疲れてるんだしな。」

「お客さん、どのへんですか？」

タクシーの運転手が二人のやり取りに割り込んでくる。

「あ、はい、その先の交差点を右にはいつてもらつてすぐの一方通行の道があるのでそれを左にお願いします。そこに学校があるのでそのすぐ向かいのマンションです。」

「はい、かしこまりました。」

「今夜はゆっくり休んで明日にそなえろよ。」

「はい、ありがとうございます。では、明日の午後、またお願いします。」

「ああ、必ず行くよ。」

そういつて挨拶をすませると香那紀はタクシーを降りる。館野が手を振ると香那紀は深々とお辞儀をした。タクシーが見えなくなると香那紀は足早にマンションの中に消えた。

翌朝は目覚めてみると、天気はどんよりしていた。とても寒く、夜には雪になりそうな感じがする。

「ホワイトクリスマスか。」

香那紀は気分がよかった。ハードな仕事だったが、ほぼ一段落であと少しの修正のみとなったこともあるが、それよりも今回は一人ではなく、館野がいろいろ協力してくれた上に、館野がいたことで重苦しい仕事の時間がこの上なくなったのしい時間となったからだ。おまけに昨夜は睡眠不足の上、ワインを飲んだこともあって深く眠れた。朝になって熱めのシャワーを浴びて気分は爽快だった。香那紀は早く会社に行つて修正を済ませたい思いに駆られていた。午後3時には館野に会える。そう思うと心が踊る。そして香那紀ははつとする。

「私、部長のこと・・・。」

香那紀は急にどきどきしてきて体が熱くなる。好きな気持ちに気付いてしまったがために、はやる気持ちが抑えられない。香那紀は食事もそこそこに身支度して会社にでかける。会社につくとすぐにPCを開けて作業にはいった。昨日館野に指摘されたところを丁寧に修正し、追加する。ひとつひとつ仕上がるたびにうれしさが増してきた。二人で作り上げた仕事が一歩一歩完成に近づく瞬間は香那紀にとつて至福のときだった。修正が完了したときまだ昼すぎだったので、香那紀は食事がてら外へ出ることにする。会社は繁華街の中心にあるため、このあたりにはデパートやショッピングセンターが立ち並ぶ。香那紀はたまに行くお気に入りのカフェに足を伸ばし、カフェ飯で軽くランチを済ませるとまだ時間があったのでクリスマスイヴで盛り上がるにぎやかなしい街の雰囲気をもう少し楽しむことにした。こんな気分で街を歩くのは久しぶりだった。以前は時々街にぶらぶら出かけてショッピングしたり、映画を見たりということもしていた。しかし、いつのまにか、そんなことも忘れてただただ

仕事に費やす日々になって毎日心も体も疲れてきつていた。つまり
ない人間だつてみんなは思うだろう、ふとそんな風に思えた。時々
はこうして気分転換したり、新しいことに挑戦したりという時がな
いと本当に魅力のないただの仕事ばかりになってしまふ。年齢も年齢
だからいつまでも惰性で人生やっていくわけにもいかない。ふと、
香那紀は館野のことを思った。館野は自分より3つ年上で独身だ。
特に決まった女性もいないと聞いていた。自分の人生をどう考えて
いるんだろう。仕事以外にも何か自分らしい時間をもっているのだ
ろうか。この先どう生きていこうかなんていうことも考えているの
だろうか。そんな疑問を持ったが香那紀は自分が考えたことを心の
中で笑う。あれだけ頭のいい人だし、自分自身をはつきりもってい
る人なのだから、なんらか自分の人生ぐらい考えているはずだ。も
しかしたら、だから決まった女性を作らないのかもしれない。結婚
という文字がいい意味で似合わない人だから仕事や自分の何か他の
ステージでスマートに生きていく人なのだろう。そのために決まっ
た相手は不都合なのかもしれない。それに館野は容姿も良くもてる
人なのでその時その時で女性には不自由しないだろう。香那紀は急
に自分が館野を好きでも叶うはずもないような気がしてきた。そう
思うと切なく心が痛くなる。柄にもなく、男の人を好きになるから
だ。しかもかなり上等なレベルの高い男の人を。それでも、香那紀
は館野に何か自分の気持ちを表現したいと思った。何もしないで終
わってしまうのは寂しすぎる気がしたのだ。社内なので告白して断
られて気まずくなるのも困るが、思いを違う形で自分なりに表現す
るぐらいならと思い立って足早にデパートに向かった。

香那紀は午後2時半には会社に戻り、館野を待った。館野は3時
少し前にやってきた。

「おつかれさん、出来上がってるか？」

「はい。完了してます。」

しつかりとした口調で香那紀がいうと館野は頷いた。

「じゃ早速見せてもらおうか。」

「はい、あちらの会議室に準備してございます。」

会議室で事前プレゼンのプレが始まった。香那紀はできるだけ冷静に理論的に話をすすめた。館野は厳しい顔でじつとスクリーンを見つめて話を聞いている。中盤にさしかかったときだった。

「麻生くん、やはり、そのところははじめに出しておいたほうが説得力がでるんじゃないかな。どう思う？」

「はい、やっぱりですか。とても悩んだんです。こちらを先に出しておいたほうが前提が理解できてあとの納得度も高いですよ。わかりました。そうします。」

香那紀はそういうとノートにすばやくメモする。

「じゃ、そのあと続けてくれないか。」

「はい。」

仕事のときの館野は表情ひとつ変えず、端正で厳しい顔をしている。その表情は話を聞きながら別のところだなにか頭の中で計算してひとつと違う展開を考えているようでもある。事実、館野と仕事の話をすると先の先まで見越してさまざまなことを多角的に考えているのが伺える。香那紀は館野の広い視点で物を客観的に見ているからこそ出てくる意見にいつもおどろかされた。その意見に刺激されて香那紀もさまざまなアイデアが浮かぶようになるのだ。きつとこの仕事も館野がいなかったらこんなな充実したものにならなかっただろうと思った。それだけに内容は自信が持てるものに仕上がってきた。香那紀は緊張しながらもすべての資料で説明を無事終えて、大

体自分が言いたいことが表現できていたように感じて満足できた。「よし、なかなかいい物になったな。一箇所いれかえてそれで完成だ。早くやってしまおう。明日の統括プレゼンがんばれよ。繁野じやなくて直接君がプレゼンできるように段取りしておくから。」

「え？私ですか？」

館野は笑顔で頷く。

「そりゃあ、そうさ、こんな内容繁野じゃ話できやしな。君か俺じゃないと無理だよ。」

「そんな、でも、それなら部長がお話なさった方が信頼感があつて統括もご納得されるのではないですか。」
館野が首をふる。

「君がここまで努力して仕上げたんだ、君が話をするべきだよ。しかも俺は一応部外者だからな。これは営業企画部の仕事だよ。」
そついうと館野が香那紀の手をとる。

「大丈夫だ。君ならうまくやれる。」

香那紀は館野の大きくて暖かい手にときどきしながらも昨夜タクシ―中で感じたような安心感が生まれて明日のプレゼンもなんとかやりこなせるような気がしてきた。内容も館野がいたせいでかなり緻密に積み上げられ、どこにも損傷はない。

「はい、わかりました。がんばります。」

香那紀はそついうと館野の手から自分の手を離してプレゼン用につかつたPCの電源を落とし、一礼してデスクに戻っていった。一時間ほど作業に集中していた。その間、館野は会議室でなにやらいろいろなところに電話しているようだった。最後の修正が終わり、もう一度館野に確認してもらって最終承認をすませると香那紀は急に緊張してきた。もうこれで、この仕事は明日のプレゼンを成功させるだけだった。直接館野と一緒に仕事するのはこの後はない。香那紀はPCの電源を落としながら、出来るだけ平静を装って館野に声をかけた。

「あの、館野部長。」

「どうした？なんだ緊張してるのか？明日のことなら大丈夫だよ。」

「あ、いえ、違うんです。あの、これ。」

そついうって香那紀はリボンがついた包みを差し出した。館野は驚いた顔をしている。

「すみません、あんまり気が利いたものじゃないと思うんですけど、週末でしかもクリスマスなのほとんど仕事につき合わせてしまったので、お詫びと感謝の気持ちです。もらっていただけませんか。」
「へえ、君からのプレゼントか。うれしいね。あけてもいいかい？」

香那紀は照れくさそうに頷いた。館野が包みを丁寧に開けるとそこから淡いグレーのカシミアの上品なマフラーが現れた。館野がうれしそうに箱から取り出す。

「ありがとう。大事にするよ。」

そういつて大事そうに首にかけた。香那紀は館野に喜んでもらえてほっとしていた。そして名残惜しかったが、丁寧に挨拶するとコートとバッグをもってあわてて館野に背を向けた。そのとき館野が呼び止めた。

「ああ、麻生くん、俺も君にプレゼントがあるんだよ。」

「え？」

館野の思わぬ言葉に香那紀は驚いた。そして館野のほうに振り返ると館野がすぐ後ろに立っていた。香那紀はあまりに近くに館野がいてびっくりした。館野はその様子にくすくす笑っている。

「なんですか、急に後ろに立たれるとびっくりするじゃないですか。」

「香那紀がバツが悪そうにふくれっ面で館野に噛み付く。」

「ごめん、ごめん、君があわてて帰ろうとするものだからちょっとあせってしまっただけ。」

香那紀は自分の行動をぴたりといい当てられてしまい、さらにどきどきとした。

「あの、そういうつもりじゃないんですけど、すみません。」

「じゃ、どういふつもりだったんだい？」

香那紀は応えにつまってしまった。館野があまりに至近距離にいたので誤魔化してその場を繕うこともできない。館野は困っている香那紀の顔を樂しそうに覗きこんでそのまま香那紀の唇に軽くキスをした。香那紀はおどろいて呆然としている。

「プレゼントはこれ。」

館野が笑っている。

「えっ？」

状況を把握できてない香那紀にさらに館野が言葉を続ける。

「仕事じゃなくて今からプライベートでつきあって欲しいんだけど。都合は？」

香那紀ははっとした。

「えっ、あ、別に予定はないです。」

急にどきどきして体が熱くなる。

「じゃ、きまりだ。せつかくのイヴだから今からデートしよう。」

館野は優しく微笑みながら、まだ驚きの顔をしている香那紀の手をとり引き寄せると優しく抱きしめる。香那紀の体は館野の胸にすっぽりと納まっていた。どきどきして体が熱い。でも、不思議と館野に触れられると暖かく包まれるようで気持ちが良い。香那紀は館野に体をあずけて目を閉じた。館野は体を預けてきた香那紀をしっかり受け止めて強く抱きしめるとゆっくりと香那紀の顔を覗きこむように頭を下げる。香那紀が目を開けると目の前で端正で知的な館野がその漆黒のように黒い瞳をまっすぐに香那紀に向けていた。香那紀は少し照れるように顔を赤くしながらその瞳に伝えて見つめ返した。

「香那紀、好きだ。」

館野は一言そういって香那紀にもう一度口づけする。今度は香那紀もそれに応えるように唇を重ねた。いつのまにか日が暮れて暗くなつた窓の外には白い雪が空から舞い降り、イヴの夜にロマンチックな甘い華やかさを演出していた。

#8 (前書き)

これで完結です。最後までお楽しみください。

その夜は夢のような一夜だった。香那紀は今年も憂鬱なクリスマスを迎えるはずだった金曜日の自分を思いやった。その時は館野の存在もたまに会議で出逢うだけの遠い存在だった。今はこうして隣で無防備に眠っている。香那紀にとっては奇跡のような出来事だった。香那紀は今幸せをかみ締めている。思わず笑みがこぼれた。ふと館野に目をやると眠っていたはずの館野が香那紀をじっとみつめている。香那紀は急にはずかしくなつて顔を赤らめた。

「信じられないな。君がこうして俺の隣にいるなんて。」

館野はふっと少し真面目な顔になる。

「君のことずっと好きだったんだ。」

香那紀は今はじめて明かされる事実をきいて驚いた。

「え？いつから？私のことご存知だったんですか？」

「もう、その敬語やめてくれよ。仕事の場だけでいい。」

館野は少し微笑むと香那紀を引き寄せてやさしくキスをする。

「君をはじめて見たときからさ。2年ほど前かな、君がマネージャーに昇格して会議ではじめてプレゼンした時だよ。綺麗で頭が良くて凛々しい、颯爽としている君の姿に惚れたんだ。一目惚れだよ。その時からしょっちゅう君を見てた。前から笹本の存在は気になっていたけど、金曜日は偶然とはいえ休憩室でばったりあってこれは縁があると思った。だから少々強引だったけど仕事を手伝うことにしてしまっただ。でも、君との仕事は楽しかったよ。おかげで仕事でもいい思いができた。」

香那紀はまだ驚いている。

「香那紀、君にもうひとつプレゼントがあるんだ。」

そういつてベッドサイドの引き出しに手を伸ばすとリボンがついた小さな箱の包みを取り出した。その包みを香那紀の目の前にもってきて館野が照れくさそうに微笑む。

「サイズがあうといいんだけど。」

香那紀はどきどきしながらその包みを受け取って丁寧にあける。そこにはダイヤがはめ込まれた指輪がおさまっていた。館野がその指輪を箱から取り上げると香那紀の手をとり、そっと丁寧に薬指にはめる。驚くことにぴったりだった。

「ステキ！それにサイズもぴったり。どうして？」

「昨日の午前中にあわてて探しにいったのさ。だから、3時にしたんだ。ほとんど仕上がっていたから午後から来ても修正は間に合うだろうし。でも、なかなか恥ずかしかった。サイズ聞かれてわからないからそこにいる店員さんで香那紀の指のサイズに近そうな人を探して聞いたんだ。よかったよ。ぴったりで。」

館野はテレながらもうれしそうだ。香那紀はすごく感激して勢いよく館野に抱きついた。そして自分から館野にキスをした。館野ももう一度香那紀にキスを返す。出来ればこのままずっと香那紀をこうして抱きしめていたかったが、時間を見るとそうもいつてられなかった。

「さあ、そろそろ支度しないと、月曜から遅刻するわけにいかないし。先にシャワー使っていいよ。君の方が時間がかかるだろ？俺はすぐに支度できるから。」

そういつて館野は起き上がってキッチンに向かった。

香那紀がバスルームから出てくると、コーヒーのいい匂いがした。「コーヒーいれておいたよ。ブラックの濃い目だったろ？水をのみたいのなら冷蔵庫にはいつている。グラスは適当に使ってくれ。」

「ありがとう。」

香那紀は夕べはワインをたくさん飲んで少しほろ酔い加減だったのであまり気付かなかったが、館野の部屋は館野らしく上品な質のいいウツドの家具がそろっており、すつきりとしているがややクラシカルな感じもして落ち着いた佇まいだった。あまり生活観がないかと思いきや、キッチンは男の人の割にいろいろなものが揃えられていてよく手が入っている気がした。そんなことを思いながら香那紀

は着替えて髪を整え、化粧をする。館野が出てくる頃には館野が入れたコーヒーを飲みながらくつろいでいた。館野は洗面所で身支度をととのえ、香那紀の前に再び現れた時には会社でいつも見る館野になっていた。香那紀はくすつと笑う。

「いつもの部長って感じ。」

「おい、いい加減その部長ってやめてくれよ。会社だけでいい。」
困ったように館野がいう。

「はい。じゃあ、真人さん。」

照れながら香那紀が言い直す。

「そうそう、その調子。」

二人して噴出して笑う。

「さて、少し早いけどいくか。途中のカフェで朝食にしよう。昨日はなんにも用意してなかったからな。」

「ねえ、真人さんって料理するの？キッチンにやけにいろいろそろってるけど。」

館野が笑う。

「ああ、結構趣味のように料理はこるよ。今度お披露目するよ。」

「へえ、楽しみ。」

仕事以外の館野の顔がちらりと見えて香那紀はなんだかうれしくなった。香那紀にとってこの3日間のすべてが夢のようだった。

二人で館野のマンションを出ると歩いて駅まで行き、混み合う地下鉄にを経て、会社の比較的近くのカフェにたどり着いた。そこで朝食がてらもう一度コーヒーを飲んで、始業時間の15分前になってカフェを出て会社に向かった。香那紀は朝から館野と一緒に通勤していること自体が照れくさく感じていた。会社の知り合いに会うと館野と香那紀が一緒にいるのを見てみんな驚いた顔をした。香那紀はそのたびに小恥ずかしくなるのだが、館野は平気でいつものように普通に挨拶をする。それぞれのオフィスがあるフロアにくると館野が香那紀に振り返って言った。

「昨日、統括と繁野に連絡しておいたから今日のプレゼンは午後1

時からだ。資料は5人分準備しておいてくれ。俺も行くから。」

「はい、わかりました。」

「じゃ、健闘を祈る。」

香那紀は黙って頷いた。そして館野はいつもの仕事の顔で自らのオフィスに入っていった。そのタイミングを見計らってか後ろから聞きなれた声がかかる。

「先輩、おはようございます!」

笹本だった。

「どうしたんですか!館野部長と仲良く朝から一緒だなんて。」

「おはよう。笹本くん。ちよつとね。」

少し照れたように笑う。笹本はその様子にいつもと違う雰囲気を読み取っていた。

「それでどうだった?マドンナとのデートは?」

笹本はぱつと顔を赤らめてにつこり笑った。

「その顔は大成功ね。よかったわね。」

香那紀が祝福する。笹本は満面の笑顔である。

「じゃ、コーヒで乾杯しよ。休憩室で待ってて。荷物置いてくるから。」

そういうと香那紀はロッカールームに消えた。その時に笹本は香那紀の指に光る指輪を見逃さなかった。香那紀が休憩室に現れると笹本がニコニコして待っていた。

「麻生せんぱーい。先輩もいいことあったんでしょ?」

「え?」

香那紀はぎくりとする。

「なんのこと?」

「またとぼけちゃって。これ!」

笹本が香那紀の手をとって指輪を指差す。

「誰にももらったんですか。幸せそうな顔してますよ。」

香那紀がテレながら笑ってごまかす。

「もう、先輩ってばプレゼンの仕事で死んでるかと思って本当に心

配したんですよ。いつの間に幸せになっちゃったんですか。聞くまでデスクに戻しませんよ。」

そういつて笹本がくいさがる。

「あのねえ、笹本くん、あとでいいでしょ？ 始業時間よ。」

「だめです。教えてください。僕だってはずかしいけど先輩にはいつも報告してたじゃないですか。僕には内緒はないですよね。」

こうなると笹本は駄々っ子のようになって聞かない。諦めたようにため息をついて小声で言った。

「内緒にしてよ。」

そういうと香那紀は周りに人がいないのを確かめて言った。

「館野部長よ。」

「え？」

笹本は驚いて声を上げる。

「しっ！ 声大きい。」

香那紀は笹本をしっかりとつける。

「それでさっき仲良くお話されてたんですね。またどうしてそんな展開になったんですか？」

「うん、それはまた、ゆっくりね。午後統括への事前プレゼンが済んでからにしてくれない？」

香那紀はそういうと笹本を促してオフィスに向かった。

午前中にもう一度チェックをすませた香那紀は資料を5人分コピーして、早めの昼食をとり、午後に備えた。指定された会議室で準備をはじめると急に緊張してきた。準備もとのつたところ、会議室のドアがノックされる。香那紀が返事をするとう館野が統括と繁野や関係者をつれて部屋に入ってきた。全員そろったところで館野がきいて事前プレゼンが始まった。香那紀はあらかじめ用意したPCでスクリーンに資料を映し出し、落ち着いて話をはじめた。統括や部長たちは厳しくじつと香那紀の話に耳を傾けていた。自社でもともインタープライム社に提案しようとしていた案件だけでなく、インタープライム社がデルメディア社へのアプローチから新しい戦

略をすすめている内容に対して自社のあらたな提案の内容をぶつけたときには統括や部長からどよめきがでた。しかもそれによる自社の業績はもとも提案しようとしていた案件の倍以上の収益が見込める予想で、さらに将来的に積み上げると莫大な収益につながることを詳しく提示した。そのことにいたく統括が興味を示し、いろいろと質問をとばしてきた。それに対して香那紀は丁寧に詳しく応えていった。統括はしばらくじっと考えて、今週インタープライム社に商談日を設定していたが延期するように繁野に指示を出し、プロジェクトチームをつくってその内容で詳しくすすめることにした。そのプロジェクトチームには館野ともちろん香那紀が選ばれ、他に企画部のスタッフと営業企画部からは笹本が選ばれた。この4人のチームでインタープライム社の契約を勝ち取れるようすすめる運びになった。香那紀は驚いた。館野と夢のような時間を過ごせばかりでなく、仕事でも自分が思っていた成功を収めることができただ。この朗報はすぐに営業企画部に伝えられ、みんなに祝福された。

「せんぱーい、すごいですよ。プロジェクトチームですよ！しかも僕も一緒だなんて！やっぱり先輩はすごい人ですね。尊敬します。」
笹本は手放して喜んだ。

「まだまだ、これはスタートよ。インタープライムのビッグな契約を勝ち取らないと本当に成功とはいえないわ。がんばりましょうね。笹本くん。」

香那紀が先輩風をふかしてハツパをかける。

「はい。麻生先輩。」

うれしそうに笹本が返事をする。

「さあて忙しくなるぞ。」

笹本は意気揚々と仕事に取り掛かる。その様子に目を細めていた香那紀も自分のPCに向き直る。ふとメールがはいつているのに気付いてメールチェックをする。

『おつかれさん。すばらしいプレゼンだったよ。これからまたプロジェクトチームと一緒に仕事ができる。よろしくな。今日の成功に今晚祝杯をあげたいんだが、どうかな。』

メールは館野からだった。香那紀はくすつと笑ってキーボードを打った。

『ありがとうございます。館野部長のおかげです。喜んで今晚お受けいたします。』

そうして香那紀は送信ボタンをクリックした。

「メリークリスマス。奇跡のようなクリスマスをありがとう、真人さん。」

香那紀は心の中でそうつぶやいた。

T H E E N D

#8 (後書き)

最後までお付き合いいただき、誠にありがとうございます。いかがでしたでしょうか。2006年12月23日に書き始めてイヴの間に完結できてよかったです。はじめは短編のつもりですごく思いつきのよう書き始めたのですが、こんなに長くなるとは思いませんでした。(笑) にはともあれハッピーエンドを書きたかったので今は書き終えて満足しています。

是非、感想などいただけるとともうれしく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3192b/>

クリスマスの奇跡

2010年10月15日19時33分発行